

哲学委員会（第25期・第5回）

議事要旨

日時：2021年10月7日（木）10：00～11：30

場所：オンライン会議にて開催

出席者：吉岡洋（委員長）、吉水千鶴子（副委員長）、奥田太郎（幹事）、芦名定道、島菌進、土井健司、中島隆博、中村征樹、納富信留、野家啓一、佐野みどり、藤原聖子

欠席者：小林傳司（第一部幹事）

1 前回議事録の確認

前回議事録について確認を行った。

2 第一部会の審議報告

2021年8月10日の夏期部会での議事内容に基づいて、吉岡委員長より、日本学術会議の今後のあり方に関する幹事会からの提案について報告があった。特に、次の3点について意見交換が行われた。

(1) 日本学術会議の助言機能、提言等のあり方について

第182回総会期間中の2021年4月22日に日本学術会議が公表した「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」を踏まえて、「答申」「回答」「勧告」「要望」「声明」「提言」「報告」等からなる表出のあり方について、新たに「見解」という表出方法を設け、従来の「提言」は部・委員会・若手アカデミーを表出主体とする「見解」とし、それとは区別されたものとして、「提言」を、日本学術会議を発出主体とした社会に対する提言と明確に位置付け直す、という改革案が出されている。

(2) 連絡会議の設置について

現在、分野別の会議の数がかかなり多くなっているため、それぞれから出される「提言」に全体的な視点が必ずしも含まれていないこともあった。その状況を改善すべく、各分野間の連絡会議を設け、(1)の「見解」／「提言」の再設定と連動させる、という改革案が出されている。

(3) 会員選考プロセスの透明化について

学術の自立性と専門性の担保のためには、従来のコ・オペレーション方式は必須であり、それを維持しつつ、外部の意見も参考にした透明度の高い選考プロセスをつくる、という改革案が出されている。

上記3点について、次のような意見が出された。

- ✓ 各専門分野からの「見解」と、多分野の共通見解をまとめた「提言」とに分けるのは、福島原発事故後の教訓を踏まえると適切に思われる。ただし、様々な分野間での協議がきちんと行われ、多様な意見の中からユニークボイスが出される必要がある。

- ✓ 分野間の調整をすることで、「提言」の内容が玉虫色になったり、両論併記に終始したりする可能性があり、可もなく不可もなくといった薄いものになってしまう懸念がある。
- ✓ 分野横断での調整には時間がかかるため、短期で出す緊急性の高いものの場合はどうするかについても考えておく必要がある。
- ✓ 会員選考プロセスにおける「外部」とは誰なのか、というのは重要である。
- ✓ 会員・連携会員の人数を減らすということもありうるが、その場合、人員の配分は誰がどのように決めるのかは明確にしておく必要がある。また、人員削減に伴い、分科会を減らすように、という流れになるのではないかという懸念がある。
- ✓ 学協会との連携は、共通の政策的なイシューを起点に日本学術会議でこそ可能になっていた、というこれまでの実情があり、また、学協会のサポートにより日本学術会議の専門的質が担保されてきたということも否定できないため、「学会でできることは学会で」という形で学協会との関係を切ってしまうことは、長期的に考えると望ましくないのではないか。

哲学委員会として見解がまとまったわけではないが、上記のような意見が出ながらも、最終的には、改革案に対して特に異議申し立てをする必要はない、という緩やかなコンセンサスが醸成されたと思われる。

3 公開シンポジウムについて

- ・ 吉岡委員長より、今年度の公開シンポジウムの概要について説明があった。

日 程:2021年12月5日(日)13:30-17:00

テーマ:コロナ禍における人間の尊厳:危機に向き合って

開催方式:オンライン(Zoom ウェビナー)

司 会:香川知晶(日本学術会議連携会員、山梨大学名誉教授)

報告者:加藤泰史(日本学術会議連携会員、椋山女学園大学教授、一橋大学名誉教授)、
建石真公子(日本学術会議連携会員、法政大学法学部教授)、齊尾武郎(医師、フジ
虎ノ門整形外科病院)、児玉真美(フリーライター、一般社団法人日本ケアラー連盟代
表理事)

コメンテーター:美馬達哉(立命館大学先端総合学術研究科教授)、岡田真水(兵庫県立
大学名誉教授、日蓮宗僧侶)

主催:日本学術会議哲学委員会

共催:日本哲学系諸学会連合、日本宗教研究諸学会連合

4 各分科会の活動報告

- ・ 各分科会の活動状況が各部会委員長より下記の通り報告された。
 - ✓ 芸術と文化環境分科会:シンポジウム「文化の互換可能性—継承・翻訳・再生—」を2021年7月18日に開催し、参加者は約200名であった。内容は非常に充実したものとなったが、ハイブリッド開催に関わる設備面での課題も残った。また、定例の分科会もオンラインで開催している。
 - ✓ 古典精神と未来社会分科会:岩波ジュニア新書の出版に向けて、現在編集者との打ち合

わせが進行中で、方向性が定まってきた。来月に分科会を開催し、さらに具体的に出版に向けて動く予定である。

- ✓ いのちと心を考える分科会: シンポジウム「コロナ禍におけるトリアージの問題—世界の事例から日本を考察する」を2021年8月29日に開始し、参加者は約200名であった。当日の報告等に基づく書籍の刊行も検討している。来たる10月16日の分科会にて、その件と二年目の活動内容について検討する予定である。
- ✓ 哲学・倫理・宗教教育分科会: 引き続き、24期の提言が教育現場で有効に活用されるための方策について検討を続けている。すでに、教科書検定官や初等中等教育関係者を招いての研究会を開催しており、今後は、情報技術と道德教育の関係を考えるために、理系研究者との連携も検討している。また、道德教育に関わる動画コンテンツの作成も検討中である。
- ✓ 世界哲学構築のための分科会: 世界哲学諸学会連合(FISP)が最近活動を再開したため、それに呼応して、世界哲学会に提案する企画などについて分科会で検討する予定である。

5 その他

昨年10月の任命拒否問題についての現時点での日本学術会議からの対応について情報共有が行われた。2014年9月11日に日本学術会議第一部福島原発災害後の科学と社会のあり方を問う分科会より発出された「科学と社会のよりよい関係に向けて—福島原発災害後の信頼喪失を踏まえて—」も参照される必要があることが確認された。

6 次回開催について

次回の哲学委員会は、上記シンポジウム開催日と同日(12月5日(日))11:00-12:00に開催し、同日10:00-11:00に合同分科会が開催されることが確認された。